

## 結果目的語を取る古代ヘブライ語動詞

松田, 伊作

<https://doi.org/10.15017/2332709>

---

出版情報 : 文學研究. 74, pp.105-121, 1977-03-30. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

## 結果目的語を取る古代ヘブライ語動詞

松 田 伊 作

1. 旧約聖書のヘブライ語の基本形 (qal) 動詞のうち、いわゆる「結果目的語」を取り得るものについて意味論的に考察する。「結果目的語」(resultative object) という伝統的術語を、日本語の例によって説明しよう。例えば、(1)ゴハンヲ食ベル (2)ゴハンヲタク という二つの文における目的語の動詞に対する意味関係を比較すると、(1) の文の「ご飯」は「食べる」という行為と無関係にそれ以前から存在するのに対し、(2) の「ご飯」は「炊く」という行為の結果はじめて生じるものである。この(2)の文の ゴハン のような目的語を結果目的語と呼ぶのである。

従来のヘブライ語文法の記述においては、例えば Brockelmann が、動詞の目的語を *affiziertes Objekt* と *effiziertes Objekt* とに分け、前者は行為が直接加えられる対象を表わすのに対し、後者は行為の結果生じるものとした。そしてこの *effiziertes Objekt* は、それと統合する動詞と同語根の名詞であることが多いとして、「そこでヤコブは碑(*mššbh*)を立てた(*jššb*)」(創35:14)、「地は草(*dš'*)を生じる(*dš'*)であろう」(創1:11)、「彼はそれらの皮をはいで(*pššl*)、白いはぎ痕(*pšlwt*)を作った」(創30:37) のような例を挙げる<sup>(1)</sup>。これらの文における動詞はすべて派生形(*pi'el* や *hif'il*)である点が特徴である。

*Pi'el* 形については E. Jenni が、それと基本形や *hif'il* 形との意味的相異について研究し、*pi'el* の意味は従来いわれていたような *Intensiv* や *Kausativ* ではなく、*das Bewirken des dem Grundstamm entsprechenden adjektivisch ausgesagten Zustandes* (基本形 [の意味] に対応する形容詞的に表出された状態を生ぜしめること) であるとし、基本形が他動詞であるときはその *pi'el* は *resultativ* であって、*das Bewirken*

des adjektivisch auszusagenden Ergebnisses der Handlung im Grundstamm ohne Rücksicht auf den aktuellen Hergang (行為の過程を考えずに、基本形の表わす行為の、形容詞的に表出さるべき結果を、生ぜしめること)を意味する、とした。<sup>(2)</sup> 例えば、hlqは基本形では《teilen》する過程を問題にするのに対し、pi<sup>e</sup>l形は《geteilt machen》であって、《teilen》された結果だけを表出する、という。<sup>(3)</sup>

Jenni はこのように、動詞の一派生形と基本形との体系的意味関係として resultativ なる概念を導入したのであるが、彼の言う resultativ —これに対して行為過程が問題になる Aktionsart を aktuell と彼は呼ぶ—は、E. Leisiにおいて既に見出される概念である。すなわち Leisiは、動詞を、*winken, gehen, laufen* 等々のように、‘感覚的に認知できる行為の様式’(die sinnlich wahrnehmbare Form des Aktes) が問題であるところの‘行為に条件づけられた’(aktbedingt) 動詞と、*heizen, rollen, kochen* 等のように、行為の様式ではなくその行為がもたらす結果が問題である‘結果に条件づけられた’(resultatbedingt) 動詞とに、区別した。<sup>(4)</sup> われわれが以下に扱おうとしている動詞が、この Leisi の言う‘結果動詞’に含まれることは自明であろう。結果目的語は問題の行為の目指す結果を明示するものだから。

2. J. Lyons は結果目的語 (object of result) を取る動詞を意味論的観点から existential causative と呼び、この類に属する最も普通の英語の動詞は make だと言う。<sup>(5)</sup> この make に該当するヘブライ語の動詞は ‘sh および p<sup>l</sup>—いずれも《do, make》(BDB), 《tun, machen》(KBL, THAT), 《fecit》(Zorell)—であるが、これらの動詞が取る目的語の大部分は結果目的であり、そしてそれらの名詞の多くが、ここで取上げる他の動詞に対しても、結果目的の機能を果している。これらの動詞とその結果目的語との間には《作り出す》—《作り出されるもの》という、意味の呼応関係があるからである。一方、各動詞はそれぞれ独自の結果目的語を持っているから、各動詞ごとにその結果目的語となる名詞に共通の意

味特徴を求めることによって、各動詞特有の、目的語と呼応した、意味特徴が引出せるはずである。

結果目的語を取る動詞は、常に結果目的語を伴うとは限らない。また結果目的語以外の目的語を取ることもある。例えば、炭ヲ焼ク という文においては、炭 という結果目的語が現れているが、木ノ枝ヲ焼ク という文における「木の枝」は、「焼く」という行為以前から存在するものであるから結果目的ではなく、行為が加えられる対象である。いわば「木の枝」を素材として「炭を焼く」のであるから、この木ノ枝のような目的語を素材目的語と呼ぶことができよう。結果目的語を取り得る動詞はこのように素材目的語をも取ることが多い。これらの動詞が《作り出す》という意味特徴を持っているため、「作る素材」をも、意味の上から、要求するからである。そして必要に応じてこれら二種類の目的語が一つの文に現れることもある。そのさい日本語では、木ノ枝ヲ炭ヲ焼ク とは言わず、木ノ枝ヲ(焼イテ)炭ニスル と言って、結果目的語が‘ニ格’を取るのに対し、ヘブライ語ではニに相当する前置詞(נなど)が付くこともある一方、二つの目的語をそのまま並べる場合が多い。二重目的語  $O_1$  および  $O_2$  とそれらを支配する動詞  $V$  との間には《 $O_1$  を  $V$  して  $O_2$  とする》<sup>(6)</sup> という意味関係があることを、筆者は1969年の論文で、動詞 *ntn*, *šjm*, *šjt* について見たのであるが、 $O_1$  を素材目的語、 $O_2$  を結果目的語としたとき、 $V$  がいかなる意味を持つかが、各動詞について考察されねばならない。そしてこれらの動詞は、結果目的語と呼応した意味特徴を持つと共に、素材目的語と呼応した意味特徴も持っているはずであるから、各動詞特有の素材目的語が共有する意味特徴も考察の対象となろう。

### 3. 'ph

単独の目的語としては、*mšwt*《種なしパン》(創19:3)、*lḥm*《パン》(レビ26:26 イザ44:15, 19)、*mnḥh*《素祭》(エゼ46:20)があり、いずれも結果目的である。これ以外の場合はすべて、素材目的語と結果目的語とを二重目的の形で取る。

wtqḥ-qmḥ wtlš wtpḥw mšwt. 《彼女は粉を取って捏ね、それを焼いて種なしパンにした》(サム上28:24)

wj'pw 't-hbšq 'šr hwšj'w mmšrjm 'gt mšwt. 《彼らはエジプトから持って出た練り粉を焼いて種なしパンの菓子を作った》(出12:39)

wlqḥt slt w'pjṯ 'th štjm 'šrh ḥlwt 《あなたは小麦粉を取り、それを焼いて十二のパン菓子を作る》(レビ24:5)

このように 'ph は「粉を素材としてパン類を作る」ことであり、「焼く」と訳される。目的語が意味的にきわめて限定されているので、

't 'šr-t'pw 'pw 《焼くべきものを焼け》(出16:23)

のように目的語を取らぬ「絶対的」用法も可能なのである。しかし、

't-hmṯ'mjm w't-hlḥm 'šr 'sth《彼女が作った御馳走とパン》(創27:17)

のように、'ph に呼応する意味特徴を持たぬ語——ここでは mṯ'mjm 《御馳走》——が ḥm 《パン》に加わると、これらの結果目的語はもはや 'ph ではなく、より一般的な 'sh 《作る》を、動詞として要求することになる。

本論の冒頭に挙げた例文 ゴハンヲタク や オ湯ヲワカス のような日本語の表現は、この 'ph mšwt 《パンを焼く》という表現とパラレルな現象のように見えるかも知れないが、そうではないであろう。'ph は上述のように二重目的を取り得るのに対し、日本語の 米ヲタイテゴハンヲ作ル とか 水ヲワカシテオ湯ニスル という文は、統語論的にせよ意味論的にせよ、不適格だと思われる。タク、ワカスのような動詞は結果目的語だけを要求するのではあるまいか。

ついで乍ら、日本語の 焼く は、素材目的語についての選択の自由度が 'ph よりもはるかに高く、パンヲ焼く は 'ph に相当する意味だけでなく「パンをあぶる(トーストなど)」の意味もあり、両義的である。《対象に熱を加える行為》という意味特徴を含むヘブライ語動詞のうち、bśr 《肉》を素材目的語とする šlh 《焼く、(独) braten》と、「人間」(エレ29:22)や「穀物の穂」(レビ2:14)を対象とする qlh 《焙る、(独)

rösten》は、いずれも結果目的語を取らない。śrp 《燃やす、(独) (ver)brennen》は創世記 11:3 で、「(天然乾燥の) 煉瓦 (lbnjm) を焼き物 (śrph) に焼く (śrp)」のように用いられるとき、結果目的語——この場合は同属目的——を前置詞 l に支配させる。

#### 4. krh, ḥpr, ḥšb

このうち常に目的語を要求するのは **krh** だけで、しかもそれらはこの動詞に対して結果目的となるような名詞に限られる。すなわち、**bwr** 《穴、掘り井戸》(出21:33 詩7:16)、**b'r** 《井戸、泉》(創26:25 民21:18)、**qbr** 《墓》(創50:5 代下16:14)、**šjhh** 《穴》(エレ18:20,22 詩57:7 119:85)、**šht** 《落し穴》(箴26:27) で、いずれも《掘られたもの》である。箴言16:27の **kōreh rā'ah** は **qārah rō'eh** 又は **kūr rā'ah** という読み換えが提唱されている<sup>(9)</sup>けれども、マソラ・テキストのままに「悪を掘る者」と読むことも可能である。「悪」を結果目的とし、「掘る」に潜在する《作る》という意味特徴が「悪」という結果目的を取ることによって表面化しているのだ、と解すれば、この表現は **'šh r'h** 《悪を作り出す者》と類義であり、「掘る」という意味が「悪」に《掘られたもの》という意味特徴を付与しているのだとすれば、「悪」は「人を陥し入れるための奸計」を意味することになる。もう一つの比喩的表現、「あなた(神)は私に耳 ('znjm) を掘った (**krh**)」(詩40:7) では、耳の穴が問題にされているのである。

**ḥpr** は **bwr** (詩7:16) および **b'r** (創21:30 26:15, 18, 21, 22, 32 民21:18) という結果目的語を取る点で **krh** と同じだが、**gwmmš** 《穴》を結果目的語として取る点で独自である。もっとも、この **gwmmš** は 1 例(伝10:8) だけの語なので、他の動詞と結び付かなかったのは偶然の結果であろう。以上のような結果目的語を取ることから **ḥpr** に《掘る》という意味特徴が含まれていることは確かであろう。しかし上に挙げた出例箇所が示すように、この動詞が **b'r** を最も頻繁に支配し、そして同じく「井戸」と訳されることはあっても実は雨水などを貯蔵するため人工的に掘

られた穴である **bwr**<sup>(8)</sup> とは違って、この **b'r** は地表に近い所を流れている泉や水場を意味することを考えると、**hpr** は少なくとも **b'r** を目的語とする場合には「掘り当てる」と訳すべきであろう。じじつ **hpr b'r** という句は、いわゆる水争いの記事に見出され、創世記 26:32 で従僕たちは自分たちが **hpr** した **b'r** のことを、「わたし達は水を見つけた (**ms'**)」と報告するのである。こういうわけで、**b'r** を目的語としない次の文では、**hpr** を「掘る」とも「探す」とも訳することができるのである：—

「イサクの従僕たちは谷の中を **hpr** してそこに湧水の井戸 (**b'r mjm hjjm**=直訳：生きた水の泉) を見つけた」(創26:19)

「全エジプト人が水を飲むためにナイル河の周囲を **hpr** した」(出7:24)

「わたしはフェラトに行き、**hpr** して、隠しておいた場所から帯を取り出した」(エレ13:7)

Zorell はこの3箇所の **hpr** を一括して **fodiendo quaesivit** (掘ることによって見出す) という訳を与えている。この動詞が **'rs** 《土地》を目的語とする文(申1:22 ヨシ2:2, 3) では文脈上「(土地を) 探る」と訳されるが、これは同形異義というよりもむしろ「掘る」→「掘りながら隠されているものを探る」→「くまなく探る」という過程をとった意味の転用と見てよいであろう。

**hšb** は **bwr** (申6:11 エレ2:13 ネへ9:25 代下26:10) を上記 **krh** および **hpr** と、また **qbr** (イザ22:16) を **krh** と、それぞれ結果目的語として共有するほか、**jqb** (イザ5:2) をこの動詞独自の結果目的語として取る。この **jqb** は葡萄を踏んで葡萄酒を作る為に岩に掘られた扁平な穴のことで、だから **jqb** を作るためには固い岩を切り取らねばならない。このことは、**hšb** が **gzjt** 《切り石》(代上22:2) や **nhšt** 《銅》(申8:9) を目的語として取ることと無関係ではないであろう。この場合、客観的にはたしかに **hšb** という行為以前からあった物をこの行為によって明るみに出すことなのであるが、主観的にはその行為の結果、石なり銅なりが出来たのであって、やはり「結果目的語」であるということができよう。日

本語の 石炭ヲ掘ル も同種の表現であろう。

なお、《掘る》という意味特徴を共有する以上三つの動詞には、二重目的語を取る例が見出せない。

### 5. bnh と ntʿ

この両語は例えば、

彼らは家を建てて (bnh) そこに住み、

葡萄園を植えて (ntʿ) その実を食べる。

建てて (bnh) , 他の人が住むことなく、

植えて (ntʿ) , 他の人が食べることはない。(イザ65:21-22)

のように類義的対語として用いられることが多い。じっさい ntʿ の全用例 56箇所のうち約3分の1の箇所で bnh とのパラレルズムが見られる。とくに上に掲げた箇所の後半のように目的語を取らぬ文では、伝道の書 3:2 —ここでは反義的対句が羅列されていて、ntʿ は 'qr ntʿw' 《植えられたものを抜く》と、また bnh は3節で prš 《取り壊す》と、パラレルをなす—を唯一の例外として、すべて bnh との対語なのである(イザ65:22 エレ1:10 18:9 31:28 45:4)。

5.1. しかし両動詞の目的語については、比喩的に「人・民族」を意味する語を取る場合をのぞくと、共通のものが見出せない。すなわち bnh の結果目的語としては、

bjt 《家》(創33:17ほか約120例)<sup>(a)</sup>, 'jr 《町》(地名も含め、創4:17ほか約55例), mzbh 《祭壇》(創8:20ほか約45例), hwmh 《防壁》(王上3:1ほか12例), bmh 《祭儀のための高所》(王上11:7ほか10例), šʿr 《門》(王下15:35ほか6例), hkl《神殿, 宮殿》(ホセ8:14ほか5例), mgdl 《塔》(創11:4ほか5例), djq 《防塁》(王下25:1ほか4例), mllw' 《ミロ》(王上9:15ほか2例)<sup>(a)</sup>, mqdš 《聖所》(詩78:69ほか2例), 'ljh 《高殿》(エレ22:13ほか2例), jsj' 《脇屋》(王上6:5, 10), mšwr 《保塁》(申20:20 ゼカ9:3), bjrnjjwt 《要害》(代下17:12 27:4), mbw' 《入口》(王下16:18), ḥjṣ《内壁》(エゼ13:10),

gb ≪(聖娼と交る)台≫ (エゼ16:24), rmh ≪(淫行の爲の)高台≫ (エゼ16:25), lwh ≪横板≫ (エゼ27:5), sjwwn ≪立札≫ (エゼ39:15), gdr ≪城壁≫ (ミカ7:11), tjrh ≪塔≫ (雅8:9), bjrh ≪神殿≫ (代上29:19) .

これに対して nt' の結果目的語は,

krm ≪葡萄園≫ (創9:20ほか17例), gnnh ≪畑≫ (エレ29:5, 28), gn ≪園≫ (創2:8) .

そして nt' krm は7箇所 (申20:5-6 28:30 イザ65:21 エゼ28:26 アモ5:11 ゼパ1:13 伝2:4) で bnh bjt と, 2箇所 (ヨシ24:13\_アモ9:14) で bnh 'rjm と, それぞれ対句を形成している.

5.2 bnh の結果目的語となる上記の名詞の多くは 'sh に対しても結果目的語となる. 例外は mgdl ≪塔≫, mšwr ≪保壘≫, ḥmh ≪防壁≫, š'r ≪門≫, gb ≪高台≫, hkl ≪神殿, 宮殿≫ などであって, これらの名詞が 'sh の目的語となっている例は見出せない. 一方 'sh の目的語とはなるが bnh の目的語とはならない名詞は枚挙にいとまが無いが, われわれの関心を惹くものとしては, tbh ≪方舟≫, 'rwn ≪箱≫, šlhn ≪机≫, dlt ≪扉≫などがある. škkh ≪仮小屋≫は目的語として出る6例のうち1例が hqjm ≪立てる≫ に支配される外はみな 'sh に支配され, 'whl ≪天幕≫は nṯh ≪拡げる≫ に支配される9例, 'sh に支配される2例に対し, bnh の目的語となる例は見出せない. 以上のような結果目的語となる名詞の意味考察から次のことが言える. すなわち, 方舟とか箱とか天幕に代表されるような≪移動される≫という意味特徴を含んだ語は, たとえ方舟のように大規模な構築物を表わすものであっても, それを bnh すると言うことは不可能なのである. これに反して例えば sjjn ≪立札≫のように, たとえ構造は単純であっても, ≪移動される≫という意味特徴を含まぬ——言換れば移動を目的として作られたのではないものを表わす——語は, それを bnh すると言うことができるのである.

bnh および 'sh のいずれとも統合し得る名詞のうち, 'sh の目的語と

なる例が最も多いのは *mzbh* 《祭壇》である。そして例えば創世記35章で、「そこに祭壇を作れ (*'sh mzbh*)」(1節)という神の命令の実行が「そこに祭壇を築いた (*bnh mzbh*)」(7節)と記述されているのを見れば——これらはいずれも同一資料(E)とされる——、両動詞は少なくとも *mzbh* という目的語に対しては全く同義的であるかのように見える。しかしながら *bnh mzbh* または *'sh mzbh* という句の現れる文脈をさらに詳しく比較検討すると、両者の間には素材について相異のあることが分る。すなわち、*bnh* される祭壇は「石」を材料とすることが明記される(申27:5, 6 王上18:32)か、ないしは含意されている——つまりその祭壇は犠牲を火で焼く「燔祭」を捧げるためのもの(創8:20 22:9等)である——ことが多い。少なくとも素材が明記されている限り、それが石以外の物であることはない。これに反して *'sh* される祭壇はその大部分が素材を明記され、それによれば僅かに1例だけ(出20:25)が「石」であり、他は「土」(出20:24)、「青銅」(出38:30 代下4:1)、「金」(王上7:48 代下4:19)、または「木」(出27:1 30:1 37:25 38:1など)を素材とする。青銅・金・木材を素材とする祭壇は、神殿構築の記事に出るものであって、他の *'sh* されるべきもろもろの器具と共に、精巧な作品であるべきことが規定されている。これに対して族長時代の祭壇は「切石を用いず」(出20:25)自然石を積上げただけのものであったのである。

5.3 一般に *bnh* が素材目的語を取る文例は少なく、素材目的語だけが出るのは、

*lbnjm nplw wgzjt nbnh* 《煉瓦が落ちたら、切り石を築こう》(イザ9:9)

*wjś'w 't-'bnj hrmh w't-'sjh 'sr bnh b's'* 《バァシャが築いたラマの石と材木を彼らは運んで来た》(王上15:22=代下16:6)

の2例だけで、結果目的語と並べて二重目的の形式をとるのは、

*l'-tbnh 'thn gzjt* 《(もし君が私のために石の祭壇を作るのなら、) それを切石で築いてはならない》(出20:25)

'bnjm šlmwt tbnh 't-mzbh jhwh 'lhjk 《完全な石で君は君の神ヤハウエの祭壇を築くがよい》(申27:6)

wjbn 't-hšr hpnjmjt šlšh twrj gzjt wtwr krtt 'rzjm 《彼は内庭を三列の切石と一列の杉材とで築いた》(王上6:36)

wjbnh 't-h'bnjm mzbh bšm jhwh 《彼はヤハウエの名においてその石で祭壇を築いた》(王上18:32)

素材目的語はむしろ前置詞 b で導入されることが多い。たとえば列王記上15:22の、上に引用した文にすぐ続けて、

wjbn bm hmlk 's' 't-gb' bnjmn w't-hmšph 《そしてアサ王はそれらでベニヤミンのゲバとミツパを築いた》

nt' は、bnh に比べて、素材目的語を取ることが多く、その種類も豊富である。すなわち、's 《樹木》(レビ19:23 伝2:5), zjt 《オリーブ樹》(申6:11 ヨシ24:13), šrq 《良質葡萄》(イザ5:2 エレ2:21), gpn 《葡萄樹》(詩80:9), 'šl 《柳》(創21:33), 'hljm 《沈香樹》(民24:6), 'rn 《月桂樹》(イザ44:14), 'rz 《杉》(詩104:16)。

これらの語が表す樹木は、「植える」という行為の結果はじめてこれらの名で呼ばれるものでないことは、詩篇80:9の

あなたは葡萄の木(gpn)をエジプトから抜取り、…それを植えた(nt')の文からも明らかであり、これがある土地に nt' されて「葡萄園」(krm)などと呼ばれるものになる事情は、ちょうど「石」がある場所に bnh されて「祭壇」になるのと同じであるから、「石」を bnh の素材目的語と呼んだように、これらの語を nt' との関係で素材目的語と呼ぶのである。これまでの考察から一応明らかなように、bnh と nt' とは、《その素材がある場所に固定させる》という意味特徴を共有し、素材に細工を施すという点は少なくとも relevant ではない。

5.4 前節の終に言及したように、bnh および nt' という行為は、本稿で扱う他の動詞と異り、その素材を固定させるべき場所を必要とする。この点が次の問題と関連してくる。すなわち、この二つの動詞は 《荒れた

所》という意味特徴を含む名詞を目的語として取ることがあるのだが、この目的語と所与の動詞との意味関係をどのように位置づけるかという問題である。例文を挙げよう：――

bnjtj hnhrswt, ntʿtj hnšmmh ≪ (君達の周囲に残った諸国民は) 私 (ヤハウエ) が荒れた所を **bnh** し, 荒地を ntʿ した (ことを悟る) ≫ (エゼ36:36)

ntʿ についてはこの1例だけであるが, **bnh** はこのほか, ḥrbh (イザ58:12 61:4 マラ1:4), hrjsh (アモ 9:11) を目的語として取る. nhrswt および hrjsh と同語根の動詞 hrs は「彼ら(悪人ども)はヤハウエの行為とその手の業とに目を留めないので, 彼(ヤハウエ)は彼らを滅ぼし (hr-s), 彼らを建て (**bnh**) ない」(詩28:5) のように, **bnh** の反義的対語として現れることもある. これからも分るように, これらの名詞は本来建物があった所が破壊された状態を意味し, ḥrbh と共に何れも「廢墟」と訳すことはできるのであるが, われわれの資料におけるきわめて限定された用例だけからは, これら各語の意味の相異を明らかにすることはできない. しかしいづれにせよ **bnh** に対して結果目的の資格を持つものでないことは, 上の説明から既に明らかであろう. 上に掲げたエゼキエル書 36:36 で ntʿ の目的語となっている nšmmh の語根 šmm は, 「わたし達が生きるために種を下さい. そうしたらわたし達は死なずに済み, 土地も **šmm** しないでしょ」(創47:19) のような用例が示す如く, 土地については放置されたため荒れているさまを意味する. 従って nšmmh が ntʿ の目的語であるとき, それはそこに何らかの植物を ntʿ して畑なり果樹園なりとすべき土地を指すことはほぼ明らかである. とすればこれとパラレルの関係にある nhrswt, ḥrbh, hrjsh も, そこに何らかの建物を **bnh** して, それを「町」などと呼ばれ得るようにすべき場所を意味するのではなにか. このような解釈に立てば, 問題の名詞は動詞に対して, 素材目的でも結果目的でもない第三の関係, いわば「素材目的」とでもいうべき関係にある, ということができよう. 素材と結果とは動詞の中に潜在している

ことになる。

ところが **bnh** は一方では、

**wbnw ḥrbwt 'wlm, šmmwt r'šnjm jqwmmw** 《彼らは永遠の廃墟を **bnh** し、いにしえの荒地を起す》(イザ61:4, 58:12をも参照)

のように「廃墟」を目的語としつつ、**qwmm** 《raise up (BDB), auf-richten (KBL)》ともパラレルをなす。**bnh** はこのほか、**jsd**《establish (BDB), festgründen (HAL)》(詩78:69等)や**hkjn** 《set up (BDB), errichten (HAL)》(詩89:5)とも同義的対語として用いられる。このようなパラレルから、**bnh** には《倒れたものを起す》という意味特徴も含まれていると推論することができる。とするとこの動詞が「廃墟」を目的語として取るとき、《廃墟を復旧する》ということであり、「廃墟」は素材目的語と見なし得るのではなかろうか。「廃墟を起して町にする」のであるから。上に引いたエゼキエル書 36:36 の直ぐ前の35節では次のように言われている：

人々は言う、荒れ果てた (**nšmmh**) この地はエデンの園のようになった。荒れ (**ḥrbwt**) に荒れ果て (**nšmmwt**)、破壊された (**nhrswt**) 町々が、人の住む防備ある町々となった。

つまり「君の町々を廃墟 (**ḥrbh**) とし、君は荒地 (**šmmh**) となる」(エゼ35:5)と言われたのと正反対の事態なのである。

**bnh** のこの意味特徴は、この動詞が比喩的に「民族」を目的語とするとき、とくに著るしい。例えば

私 (ヤハウエ) は彼らを恵もうと、私の目をその上に注ぎつつ、彼らをこの地に連れ帰る。私は彼らを **bnh** し、彼らを壊さない。彼らを **nš** し、彼らを抜きはしない。(エレ24:6)

私 (ヤハウエ) はユダとイスラエルの運命を転換し、初めの時のように彼らを **bnh** する。(エレ33:7)

「祖国への帰還」ないし「運命の転換」という鍵言葉が示すように、これらの文では、捕囚の民を本来の状態に復帰させることが述べられているの

である。

本論文は意義素の仮定を目的とするものではないが、以上の考察に基づいて *bnh* の意義素を立てるとすれば《(素材を) 起して (ある場所に) 築き上げ (不動のものとする)》となるうか。

## 6. *jsr* と *br'*

この二つの動詞は、

*l'-thw br'h lšbt jsrh* 《彼はそれ (=地) を空しくは創らず、住むためにこれを造った》 (イザ45:18)

*jwšr hrjm wbr' rwh* 《山々を造り風を創る者》 (アモ4:13)

のように同義的対語として現れることから分るように、多くの意味特徴を共有している。第一に、これらが直接目的語を取るとき、それは常に結果目的語として機能し、第二に、これらは同じ名詞を結果目的語として取る。いまそれらの名詞を意味的に分類して示せば、

- (1) 自然現象 *br'* の目的語としては、「天と地」(創1:1 イザ45:18), 「天」(イザ65:17), 「地の涯」(イザ40:28), 「星辰」(イザ40:26), 「雲」(イザ4:5), 「風」(アモ4:13), 「北と南」(詩89:13), 「暗黒」(イザ45:7), 「すべての業」(創2:3). *jsr* の目的語としては、「地」(イザ45:18), 「大地」(詩95:5), 「四季」(詩74:17), 「光」(イザ45:7), 「山々」(アモ4:13), 「万物」(エレ10:16 51:19).
- (2) 生き物 *br'* の目的語としては、「人」(創1:27ほか約15例), 「水に住む動物」(創1:21). *jsr* の目的語としては「人」(創2:7, 8), 「生き物と鳥」(創2:19), 「レピヤタン」(詩104:26), 「目」(詩94:9), 「イスラエル」(イザ43:1ほか6例).
- (3) 人の行為・態度 *br'* は、「災禍」(イザ45:7, 8), 「唇の実 (= 祈りの言葉)」(イザ57:19), 「純なる心」(詩51:12). *jsr* は、「心」(詩33:15), 「人の霊」(ゼカ12:1), 「災禍」(エレ18:11).

このようなものを人間が作り出すことはできないから、これらの目的語を取る場合、その動詞の主語は当然「神」(*jhwš*, *lhjm*) である。

br' と jsr は、以上のような共通点を持つ一方、次の点で相異が認められる。

(1) br' は主語として常に神——異教神でない jhwh ないし 'lhjm——を取る。これに反して jsr は、上記以外の目的語を取る文では、「人」を主語とする。すなわち「偶像」(psl イザ44:9, 12 ハバ2:18; 'l イザ44:10) を jsr するのは「空しい」人間であり、「陶器」を jsr するのは陶器師で(イザ45:9), 権力の座にある者が「不法」を jsr する(詩94:20)。

(2) この事実と対応して、br' は素材目的語を決して取らぬのに対し、jsr は取る場合がある。すなわち、

wjjsr jhwh 'lhjm 't-h'dm 'pr mn-h'dm ≪ヤハウエ神は人を土の塵で作った≫(創2:7)

ここでは二重目的語の形式をとるが、次の文では素材目的語が前置詞 mn ≪から≫で導入される：

wjsr jhwh 'lhjm mn-h'dmh kl-hjt hsdh w't kl-'wp hšmjn ≪ヤハウエ神は土から野のすべての生き物と天のすべての鳥を造った≫(創2:19)

すなわち、br' は神による、素材を必要としない創造を表わすのに対し、jsr の意味においてこの点は relevant でない。

## 7. 二重目的語

上の§2で挙げた拙論において、二重目的語の意味構造として

≪O<sub>1</sub>=O<sub>2</sub>≫「O<sub>1</sub>はO<sub>2</sub>である」

があることを述べたが、前節に引用した創世記 2:7は

kj 'pr 'th w'l-'pr tšwb ≪なんじは塵であるから、塵に帰ることになる≫(創3:19)

と対応している。

hmzbn 'š...w'rkw wqjrtjw 'š... (エゼ41:22) はテクストに問題があるが、これをそのまま読むと「その祭壇は木であった…その台とその脇は

木であった…」と訳され、「木を **bnh** して祭壇にする」という二重目的構文の基底構造を示している。

‘sh という動詞はその基本形だけでも旧約聖書に 2527 回用いられており、上に取り上げた動詞の大部分とその結果目的語を共有することは既述のとおりであるが、二重目的語を取る例もきわめて多く、その点でも「作る」動詞の典型である。例えば、

w'sjt šlhn 'sj šttjm ≪君はアカシヤの木で机を作ることになる≫ (出 25:23)

**bnh** との対比で、‘sh には素材に細工を施すという意味特徴があることを §5.2 で暗示したが、動詞と二重目的語とから成る文の意味構造 ≪O<sub>1</sub> を V して O<sub>2</sub> とする≫ に従って **wjbnh 't-h'bnjm mzbh** (王上18:32) を「石を築いて (**bnh**) して祭壇とした」と解釈できるとすれば、‘sh については「アカシヤの木を加工して (‘sh) 机とする」と言うことができる。

‘sh についてはこのほか、「虚偽」「義」「不法」など行為そのものに対する倫理的判断を表す語を目的語とする点で **p'l** と同じであることなど、考察を必要とするが、それは別の機会にゆずりたい。

## 8. 結 び

以上、結果目的語を中心として若干の動詞について意味論的考察を行ったのであるが、語形成論的に見た場合、ここで取上げた基本形 (**qal**) の動詞がすべて **pi'el** 形を持っていないことは注目に値する。<sup>(4)</sup> §1 で紹介したように **Jenni** は基本形で他動詞の機能を持つ動詞は **pi'el** 形で **resultativ** という **Aktionsart** を持つことを明らかにしたのであるが、われわれの扱った動詞は基本形で既に **resultativ** であるため **pi'el** 形を必要としないのだと見ることができよう。

## 註

(1) Carl Brockelmann: Grundriss der vergleichenden Grammatik der semitischen Sprachen. II. Syntax. Berlin 1913, §198—202. 同著者による Hebräische

Syntax. Neukirchen 1953は本質的にはこれと同内容で、これでは§90—93. 目的語のこのような二分法は Paul Joüon: Grammaire de l'hébreu biblique. 2 éd. Paris 1947, §125にも継承されている。なお Joüon が本書で用いている accusatif de résultat という術語は, "(la vigne) montera en ronces et en épines" (イザ5:6) や "la bouche du juste s'épanouit en sagesse" (箴10:31) の例が示すように, 主体自身に結果した状態を表わす '対格' で, 主体とは別個の存在を表わすわれわれの結果目的語とは別である。

- (2) Ernst Jenni: Das hebräische Pi'el. Syntaktisch-semasiologische Untersuchung einer Verbalform im Alten Testament. Zürich 1968, p.275.
- (3) 上掲書, p.126—7.
- (4) Ernst Leisi: Der Wortinhalt. Seine Struktur im Deutschen und Englischen. 2. Aufl. Heidelberg 1961, p.93—4.
- (5) John Lyons: Introduction to Theoretical Linguistics. Cambridge 1969, p.439—40 .
- (6) 「古代文献語の意味考察——ヘブライ語一動詞群について——」『現代言語学』 p.299—311.
- (7) Biblia Hebraica Stuttgartensia, 1974.
- (8) 'Zisterne, birnenförmige, oft tiefe (künstliche) Aushöhlung im Felsboden, die der Aufspeicherung des Winterregens, auch für Korn dient' (HAL)
- (9) 'Wasserstelle, Grundwasserbrunnen' (HAL)
- (10) 'zwei flache im Felsboden ausgehauene Gruben, durch e. Rinne verbunden, die eine höher als die andre gelegen; in der obern werden Trauben oder Oliven durch Treten gekeltert; in der untern, wohin d. Saft fließt, klärt er sich zu Wein oder Öl' (KBL)
- (11) 申25:9やルツ4:11の「家を bnh する」は「Levirat 婚によって家を相続する」という意味の慣用句であるが、ここでは文字通りの意味を問題にする。
- (12) 適訳が無いためか聖書協会訳で「ミロ」と音訳されているこの語は、防塁のような構築物か。'Stützmauern u. Aufschüttung d. Terasse vor d. Tempel d. Herodes: "Füllung", e. Bauwerk auf Terasse' (HAL)
- (13) Joüon は上掲書§125で double accusatif d'objet affecti (結果目的語の二重対格) について述べ、その中で特に次のような注目すべき記述を行っている: 'Il y a encore double objet dans le cas suivant: si l'on transforme une proposition nominale (composée d' un sujet et d'un prédicat) en proposition verbale, avec un verbe tel que faire etc., le sujet devient objet, et le prédicat devient second objet.' 「次のような場合にも二重目的語がある: (一つの主語

結果目的語を取る古代ヘブライ語動詞 (松田)

と一つの述語とから成る) 名詞文を、作る・するのような動詞を用いて動詞文に変換すると、主語は目的語に、述語は第二目的語に、なる」

- (14) KBL が 'sh«machen, tun» と同語根の pi'el としている 'išseh は、その意味——KBL 自身、基本形と無関係な 'drücken, pressen' という訳語を与えている——の点から見ても、基本形を欠く同形異義の語根の pi'el だとすべきである。この点、Zorell, Jenni (上掲書p.131—2) や THAT の記述は正しい。

参照辞書略号

- BDB F. Brown, S. R. Driver, C. A. Briggs: A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament. Oxford 1953 (2. ed.).
- HAL W. Baumgartner: Hebräisches und Aramäisches Lexikon zum Alten Testament (=KBLの第3版). Leiden, Lfg. I 1967, Lfg. II 1974 (nbṭまで).
- KBL L.Koehler-W. Baumgartner: Lexicon in Veteris Testamenti libris. Leiden 1958 (2. ed.)
- THAT E. Jenni-C. Westermann: Theologisches Handwörterbuch zum Alten Testament. München Bd. I 1971, Bd. II 1976.
- Zorell F.Zorell: Lexicon Hebraicum et Aramaicum Veteris Testamenti. Roma 1957.

[1976.10.31]